

「支那」と「皇国」——幕末の儒学者・齋藤拙堂の中国認識と自国認識——

山田 賢

はじめに

江戸後期の蕩然とした「泰平」の世は、儒学的理想の自壊を招くとともに、「皇国」の世界像を出現させていたのかもしれない。このことについては、渡辺浩がつとに明晰な見通しを示している。^① 泰平の世を生きる江戸後期の人々が儒学に対して抱いたであろう疑念——我が国は、儒者の説く面倒で理屈っぽい「聖人の道」などを移植せずとも、そのまま「泰平」を謳歌できるほどに、もとより優越しているのではないか——、そのような疑念からわずかに歩を進めれば、自国を比類なきものとして肯定する「皇国」の世界像が現れる。そして、この「皇国」の世界像は、賀茂真淵・本居宣長らを発信源としながら、国学者だけではなく広く江戸後期の社会に浸透し始めるのだが、もう一つ渡辺の指摘で重要なのは、「皇国」の世界像の出現と「支那」という中国呼称の流通との対称性である。もはや中国に学ぶ必要がないのだとすれば、かつてのように、中国を「中華」・「中土」といった文明の中心を含意する語彙によって尊重する必要もない。ゆえに中国呼称は、より価値を剥奪された「唐土」・「漢土」・「西土」、あるいはそもそも漢学の伝統的な文脈自体からも切り離された、蘭学由来の「支那」という

語彙によつて代替されるようになる。⁽²⁾ ここにおいて、「自国を天皇なるものを戴く類例のない国」とみなすことにより成立する「皇国」と、「尊大にして理屈好き、しかも実態の伴わない」「反面教師」としての「支那」とは、学知としての来源を異にしながらも、一対の価値対称的な語彙として通用されるようになっていく。

渡辺が示した以上のような枠組を基礎としながら、古賀侗庵らを対象として具体的な中国呼称・自国呼称の検討を行ったのが前田勉、眞壁仁の論考である。前田は、朱子学者・古賀侗庵について、(一)アヘン戦争以前の早い段階から、蘭学者の目を通して中国を相対化する観点を獲得していたこと、(二)そのため、彼の著作における中国呼称は、概ね年代とともに中華→齊州→西土→支那と変遷していること、(三)ただし、一つの著作が単一の中国呼称によつて統一されているわけではなく、文脈によつて異なつた中国呼称が使い分けられていたと思われること、を指摘している。⁽³⁾ 例えば、『海防臆測』では、基本的に「西土」という中国呼称が使用されているのだが、「その独善主義を非難する箇所では、意識的に「支那」を使用」していると言う。以上のような前田の研究から示唆される重要な論点は、著者がどの中国呼称を使用するのかは、すぐれて意識的な選択であつたこと、そしてその選択はときに叙述の文脈に依存しつつ決定されていた可能性があること、の二点である。

眞壁仁は、古賀侗庵が「西土」≡中国批判に随伴しつつ、「本邦」の「風氣」「風習」の優れていることを強調しながらも、自国呼称としては「神州」「大日本」といった後期水戸学の「驕矜自大」の呼称ではなく、「本邦」「吾邦」を一貫して用いている⁽⁴⁾ことに注目し、ここに「自国中華主義」への批判が込められていたと述べている。眞壁の研究は、中国呼称と自国呼称との対称性を前提とした上で、古賀侗庵が選択した自国呼称から、侗庵の自他認識と世界像を考察しようとするものであつた。

前田勉、眞壁仁らの研究は、「皇国」の世界像と「支那」との対称性、ならびに江戸後期の思想空間におけるその緩やかな社会的共有を前提にしながら、それらの語彙と語彙にまわりついている背景としての世界像が、個人のレベルにおいてどのように認識され、かつ選択されていたのかを検討するものであったと言えるだろう。

本稿は以上のような研究史を継承しながら、幕末の儒者・齋藤拙堂を取り上げ、その著述のなかに見える中国呼称と自国呼称について初步的な検討を加えることを課題としている。すでに前田勉の研究が明らかにしているように、一人の人物の著作においても、必ずしも特定の中国呼称・自国呼称が一貫して用いられているわけではなく、年代とともに中国呼称が変動する傾向性を看取することができる場合もあるだろうし、また、文の扱う主題や文脈により、そこに埋め込まれた中国呼称・自国呼称が揺らいでいる場合もあり得ると考えられる。だとすれば、中国呼称・自国呼称については、それらを語彙単独として取り出すだけではなく、それらの語彙が埋め込まれている主題や文脈とともに検討しなければならないだろう。換言すれば、どのような叙述の文脈が、どのような中国呼称・自国呼称を召喚することになるのか、その対応関係にまで立ち入った考察が求められていると言える。

まずは本論の中心的な検討課題となる齋藤拙堂について、先行研究に基づいて略歴を描写しておく。⁵⁾ 齋藤拙堂、名は正謙、または謙、拙堂は号である。寛政九年（一七九七年）、江戸の津藩邸に生まれる。江戸昌平黉で古賀精里に学んだが、津藩にて藩校有造館が設けられるや、「学職」として採用され、以後、慶応元年（一八六五年）に没するまで津が生活の拠点となる。その間に、文政八年（一八二五年）には「侍読」となり、天保一二年（一八四一年）頃まではしばしば藩主の参勤交代に従って江戸に上った。また、一方では京阪方面にも幾度か

旅に出ており、篠崎小竹など京阪の知識人とも交際のネットワークを結んでいた。弘化元年（一八四四年）には、有造館の総責任者たる「督学」に任命されている。津藩有造館督学であった嘉永年間には『経世文編抄』を刊行して清朝の学術を紹介するとともに、一方では武場を設けて西洋砲術を取り上げ、さらに種痘館を設置して種痘を施した。安政六年（一八五九年）に引退、慶応元年（一八六五年）に没する。

以上のような略歴からも窺われるように、拙堂自身は幕末の著名な儒者の一人であると同時に、その交際ネットワークは蘭学系知識人にも届いていたし、さらに文集から伺い得る範囲では国学系知識人にも及んでいた。もちろん古賀侗庵が蘭学から影響を受けていたことから明らかなように、幕末において、儒学者が蘭学や国学の動向にも通じていることは、取り立てて珍しいわけでもなかったのかもしれない。ただ、齋藤拙堂の場合には、津藩という列島のほぼ中央部に拠点を置きながら、江戸、京阪をはじめとする各地の知的動向と接点を保っていたことは銘記しておくべきであろう。換言すれば、齋藤拙堂の残した言説の内部には、江戸後期の思想空間を構成していた蘭学系、国学系などの多様な発想と言説を受容しながら、しかもそれらを儒学者、漢学者としての自己同定と矛盾しない均衡的世界像―それは矛盾を孕んだ危うい均衡であったのかもしれないが―へ収束させようとする意思が刻印されているのではないか。齋藤拙堂のテキストはそのような観点から読み直されるべきではないのか。

ただし、本論はこうした課題に未だ全面的に応えるものではない。前述のように、拙堂の文中に見える中国呼称と自国呼称を緒として、そこから彼が蘭学系の発想と国学系の発想をいかに吸収しつつ、中国認識・自国認識を核心に据えた世界像をかたちづくっていたのかについて、初步的な検討を加えるとともに、それを緒として、

幕末の思想状況への若干の展望を示すのみである。

なお、本論に引用する齋藤拙堂、ならびに参照される同時代の儒学者たちの論説は、その多くが漢文で書かれている。以下、史料の引用については特に断らない限り、漢文からの書き下しによって提示する。

一 齋藤拙堂の中国呼称——「支那」、「西土」、「満清」

齋藤拙堂の残した文中においても、中国とそれに関連する中国文化、現存する中国の政権については、おそらくそれぞれの主題や文脈に応じて、「支那」、「西土」、「漢」、「清国」、「清氏」、「満清」などの多様な中国呼称が使用されている。ただし、こうした語彙を使用せず、「我邦」と「彼邦」という対比によって、中国を指し示している場合も多いため、必ずしも以上のような中国呼称の使用頻度が高いわけではない。だとすれば、ある文章における特定の中国呼称の使用は、意図的な筆法であったと見るべきであろう。本章では、『拙堂文集』に収められた漢文著述を中心に、「支那」、「西土」、「満清」という中国呼称を検討していこう。⁽⁶⁾

(一) 「支那」

管見の限りでは、『拙堂文集』に収められた三編の文章に「支那」が用いられている。換言すれば、拙堂の文中において、「支那」という中国呼称が決して一般的な語彙として常用されていたわけではないことに留意しておく必要がある。

三つの文章の中から、まず「順正書院記」を取り上げる。順正書院とは、蘭学を学んだ新宮凉庭が、天保十年（一八三九年）、京都南禅寺近くに開いた蘭医医養成のための学校である。拙堂は、新宮凉庭に求められて、「順正書院記」なる一文を寄せていた。⁷⁾

古は、学校の士を教ふるは、孝弟を以て先と為し、修斉治平を以て帰と為す。……漢唐以後に及び、漸く古意失はれ、記覽を以て学と為し、辞章を以て業と為す。其の士を取るは、或いは詩賦を以てし、或いは経義帖括を以てし、或いは八股時文を以てす。其の事、虚にして実ならず。……蓋し聞くに、泰西諸国の学を設け士を取るは、皆、用に適ふを以て主と為す。天文地理、曆筭、鑿藥自り、銃炮の術、航海の技に至るまで、皆、学中に講ず。蓋し支那上古の風有り。……夫れ泰西諸国の天文、地理以下の技は、並びに支那の及ぶ所に非ず。（『順正書院記』、『拙堂文集』卷一）

この文章において特徴的なのは、「虚」と「実」という観点から「支那」と「泰西」が対蹠的に位置付けられていることである。拙堂の認識によれば、中国にあつても古においては「修斉治平」（修身・齐家・治国・平天下）に資する実用の学が修められていた。しかしその後の中国の人材登用は、もっぱら知識の多寡や文章の巧拙という「虚」に依拠するようになってしまい、実用の学を重んじる「支那上古の風」は、むしろ泰西諸国にこそ見出される。しかも、同時代におけるそれら泰西諸国の実用的技能は、もはや「支那」の及ぶ所ではないのである。次に「観演放天砲記」である。弘化二年（一八四五年）秋、津藩ではモルチル砲に倣って新造した大砲（「天砲」）の試し撃ちを阿漕浦海岸で実施している。「観演放天砲記」はこの観覧を契機に書かれたものである。

嘗て泰西の人の説を聞くに云へらく、支那に大礮有り、欧羅巴に先んずること数百年なり、と。然らば則

ち、泰西の大砲、安くんぞ支那の流伝に非ざるを知らんや。明末に至る迄、承平日に久しく、上下恬熙にして、軍国を以て憂と為さず。……今清氏の承平も亦已に久し。倏然として自ら大とし、武備漸く懈る。（『觀演放天砲記』、『拙堂文集』卷二）

ここでも「泰西」に先んじること数百年前に大砲を製造していた中国の過去の優秀性が認識されるとともに、明清時代における武備に対する関心の放棄、ことに同時代清朝（清氏）が驕り高ぶって自らを大国と見なし（『侈然自大』）、武備を怠った結果、「泰西」に遅れをとったことが、痛烈な対比として記述される。ここでは同時代中国の清朝は、ある特定の姓氏が支配者として君臨すること含意する「清氏」と記述され、それら各王朝が興亡した中国という文明世界は「泰西」との対比において「支那」と記述されている。

儒学者である齋藤拙堂にとって、聖人を生んだ過去、中国に対する肯定的評価は、それでも揺らいではない。しかしその後の時代において、過去の中国における実学、優れた技芸の高みを実現したのは「泰西」であり、その対比のもとにその後の中国の歴史的な世界は、敬意を払うべき中華ではなく、「支那」として突き放されるのである。なお、これも管見の限りでは、同時代の多くの儒学者たちと同じように、『拙堂文集』においても「中華」、「中土」などの語彙は見られない。むしろ多様な中国呼称を併用しながらも、「中」「華」を以て中国を示すことは、注意深く回避されているように見える。

三つ目は「八紘勝覧序」である。これは蘭学者、算作阮甫からヨーロッパの地理を紹介した「八紘勝覧」の稿本を示された折に、その序文を求められてしたためたものである。⁽⁸⁾

今日、外国の形勢、情態、尤も熟知せざるべからざる者有り。若し之を熟知せんと欲すれば、則ち遠西書誌

を考えざるべからず。何ぞや。皇国の人の遊ぶ所は、諸尊（イザナギノミコト）の生む所に過ぎず。支那の人の記す所は禹跡の及ぶ所に過ぎず。唯だ西洋の人のみ地毯面上に於て到らざる所無く、記さざる所無し。精博確実にして雑ふるに虚妄の説を以てせず。（八絃勝覧序）、『拙堂文集』卷三）

ここでは「皇国人」「支那人」「西洋人」の三つが鼎立して示される。そして、「虚妄」ではなく「確実」な地理知識を有する「西洋」の影として、「支那」が引き合いに出される構造も前二者と共通していると考えられよう。ただし、ここで注目すべきは、「皇国」という自国呼称の登場である。後に検討するが、拙堂の文中において、常に「皇国」という自国呼称が用いられたわけではなく、たとえば「我邦」のような、より価値中立的な響きを持つように思われる語彙が頻用されている。だとすれば、どのような文脈の中で「皇国」が登場するのかについても考察する必要があるだろう。

「支那」について振り返っておくならば、拙堂は決してこの語彙を常用していない。そしてこの語彙が登場する数少ない場合においては、必ず「実」学において優れる「泰西」「西洋」が同時に登場し、そして過去においては優れていながら、今や「虚」学に溺れている「支那」が対比される構造になっている。そのように考えるならば、拙堂における「支那」の使用は、蘭学からの影響があったことは確かだとしても、文脈に照らしつつ選びとられた意識的選択であったと想定されるのである。すなわち、現実的に「適用」する高度な実学を修めている「西洋」を称揚するとともに、虚学にうつつを抜かしている中国の歴史と現在を批判的に対置する文脈においてこそ「支那」が選択されたものではなかったか。

この点については、前述のように古賀侗庵の中国呼称について検討した前田勉がつとに示唆しているが、同時

代に共有されていた思想空間の復元に向けて、さらに考察を深化させるためには、幕末の儒学者たちがいかなる文脈において特に「支那」を選択していたのかについて、より網羅的な検討を加える必要があるだろう。

(一)「西土」

「支那」が「泰西」との対比のもとに、中国という「場」のみならず、そこで展開してきた歴史的・文化的な世界を統合的に捉えようとするものであったとするならば、この時代にも多くの人々が使用していた「西土」、「漢土」などは、どちらかと言えば、空間座標の中における中国大陸、「中国」と呼ばれてきた「場」を指し示すニュアンスを強く帯びた呼称であったと考えられよう。

『拙堂文集』において、「西土」という語彙が見られるのは「玉巖堂聖像記」である。

江都の書舗玉巖堂、宣聖の木像を蔵す。古色蒼然として、蓋し五百年前の物と云ひしか。文政中、幕府の士人、長崎に于役し、之を獲て持ち帰るに、主人懇請して之を得、奉じて以て宅に鎮ず。……此の像、本より西土某県に在り。洪水に遭ひ、漂蕩して我邦に至る。漁人の網獲する所と為り、遂に某氏の蔵と為る。(『玉巖堂聖像記』、『拙堂文集』卷一)

玉巖堂とは、江戸の書肆、玉巖堂和泉屋金右衛門である。幕末に多く漢学関連の書物を出版したことで知られる。嘉永年間には齋藤拙堂が津藩有造館から出版した『経世文編抄』を、ここ和泉屋金右衛門から再刊するなど、拙堂との交際があったことも推測される。⁹⁾ 玉巖堂和泉屋の主人は、長崎からもたらされた古い孔子木像を大切に奉祀していたのだが、これはもともと「西土」から「我邦」に漂流してきたものであった。この一文の中では、

「西土」は、明らかに「某県」を包含する中国という「場」を意味していると言えよう。なお、すべてが漢文で著されている『拙堂文集』において、管見の範囲では「西土」の用例は、この一例であるが、和文による著作『士道要論』の中でも、「文武を分かつてること西土、隋唐の世にも見えず」とあり、拙堂による「西土」の採用もまた、意識的な行為であつたと考えられる。なぜならば、同時代の、あるいは相前後して活躍した儒学者たちが、「場」としての中国を呼称するために用いていた語彙は、圧倒的に「漢土」であつたからである。しかし、拙堂は「漢土」を用いない。

前田勉、眞壁仁らの研究によつて明らかにされたように、一時期の古賀侗庵は「西土」を使用していたが、のちに触れる塩谷宕陰、齋藤竹堂をはじめ、佐久間象山、横井小楠らもおしなべて「漢土」を使用しており、拙堂とは逆に「西土」を見ることはできない。ただし、直ちに付言しておけば、これらの人々も、古賀侗庵や齋藤拙堂がそうであつたように、一貫して「漢土」のみを語彙として選択していたわけではない。佐久間象山は早期には「唐山」を使用しているし、横井小楠は拙堂同様「支那」も用いている。⁽¹²⁾これらについては、また別途考察すべき課題であり、ここでは「西土」に類似して「場」を示す語彙と考えられる「漢土」が、どのような文脈の中に位置付けられていたのかを検討しておこう。

まず、アヘン戦争の情報を早い段階で要説していたことで知られる齋藤竹堂『鴉片始末』に現れる「漢土」の用例を挙げておこう。なお、『鴉片始末』は、齋藤拙堂がその内容を評価する「批」を書き入れていることで知られている。

・鴉片煙の漢土に行わるること三百余年なり。

・満清、漢土を奄有すること二百年、北のかた韃靼より起り、西のかた四部諸域に主たり。幅員万里、皆臣妾と為し、其の疆の大なること、力の強なること、漢土有りて自り以来、未だ之を聞かざるなり。

・宇宙万国の風土、自ずから異なれば、孰れか夷にして孰れか夏ならんや。而るに漢土常に中夏を以て自ら居り、海外諸国を侮視すること、犬彘猫鼠の冥頑不靈の物の如し。

以上の用例の中でも、「漢土」が主として中国という「場」、空間を指し示すものであることを、もつとも明確に伝えるのが、二番目の「満清が「漢土」を領有した」という一文であろう。もつとも、「漢土」という語彙を、中国大陸という空間を意味する語彙として限定的に捉えた場合、三番目の用例「漢土は常に自らが「中夏」であるとしてきた」とは齟齬をきたすように見えるだろう。ここでは「漢土」は意思なきただの空間のみを指しているわけではなく、その空間において展開されてきた文化的共同性、そのような文化的共同性を営んできた人々なども含めて一体的に把握されているからである。もちろん、幕末において「中華」に代わる語彙として「漢土」（あるいは「西土」）が登場する以上、このような用例の生じる可能性はあった。ただし、これらを意識的に区分していたと思われる書き手も存在する。たとえば、塩谷宕陰である。

塩谷宕陰は、たとえば「漢土幅員万里」などのように、明らかに「漢土」を中国大陸という空間を示す語彙として用いている。⁽¹⁾そして齋藤竹堂との対比において注目すべきは、宕陰もまた竹堂のように「漢土は常に自らが「中夏」であるとしてきた」（「漢土常に中夏自居」）に類する修辭を幾度か繰り返し用いていることである。

・清人以華自高（『阿芙蓉彙聞序』、『宕陰存稿』卷四）

・漢人以華自居（『翻采海国図志序』、『宕陰存稿』卷四）

・漢人以華自倣（『幼幼精義跋』、『宕陰存稿』卷十二）

宕陰の場合には、「自らを「中華」である」として驕り高ぶってきた主体は、「漢土」に住まう「漢人」、あるいは現在の清朝のもとに居る「清人」であり、「漢土」と「漢人」は、意識的に「場」と「主体」として分離されているように見える。換言すれば、中国という空間も、そこにある文化的共同性も、そしてそれを支えた人々の営みも、憧憬のもとにすべてを包摂していた漠然たる「中華」という概念を、世界の多様な地域の中の一つとその住民として解体していったときに現れるのが、「漢土」・「西土」―「漢人」・「唐人」という語彙であったと考えられる。ただし、「漢土」、「西土」などが、「中土」、「中華」などから優越性を剥がし取ったのちに現れる語彙なのだとしても、それはなお東アジア漢字文化圏の中に根を下ろしている語彙であり、その点において蘭字の知に由来する「支那」とは異なっていたと言えるだろう。齋藤拙堂「玉巖堂聖像記」においても、「西土」から漂着したのは孔子の「聖像」だったのである。

（三）「満清」

齋藤拙堂に限らず、同時代の儒学者たちは、中国大陸を統治していた清朝のことを、「清」、「清国」などの語彙によって記録しているが、幕末期の一つの特徴は、「満清」という清朝呼称の広い流通である。拙堂も、「清」、「清国」などを常用していたが、「経世文編抄序」の一文においては「満清」を用いている。

「経世文編抄序」は、拙堂が中心になって刊行した和刻本『経世文編抄』のために書かれた序文であるゆえ、まずはこの刊行の経緯に触れておく必要があるだろう。和刻本『経世文編抄』の原本は、江蘇布政使の任にあつ

た賀長齡が、魏源に依頼して編纂させた『皇朝經世文編』である。道光六年（一八二六年）に刊行された『皇朝經世文編』は、清代の政治家・知識人六〇〇人以上の文章、二〇〇〇編以上を集めた、文字通り「経世」のための一大参考書として流通した。一八二六年初刻の『皇朝經世文編』は、日本各地の図書館にも十数種収蔵されており、刊行当時からかなりの量が輸入されていたのではないかと考えられる。拙堂は、「侍読」となった一八二五年から四年ごろまでしばしば参勤交代に付き従って江戸に滞在していたが、「経世文編抄序」に「舶来の初、余江都に在りて人従り借読し、其の会心なる者を手抄す」とあるように、彼はこの時に日本に渡来したばかりの『皇朝經世文編』を江戸で借り受けて読んでいた。部数の少ない輸入漢籍は貴重であり、和刻本が刊行されない限り、こうして伝手を頼って「借読」するしかなかったからである。弘化元年（一八四四年）、有造館の「督学」に任命されると、拙堂はかねてより高く評価していた『皇朝經世文編』の和刻本刊行に着手する。『皇朝經世文編』は全一二〇巻の膨大なものであるが、拙堂はこの中から「我が邦に切ならざる者」を省いて二一巻に編成し直し、嘉永元年（一八四八年）から五年（一八五二年）にかけて、有造館から和刻本『経世文編抄』を刊行した。ただし、これは「聚珍版」（木活字本）の豪華版であったため、その後ほどなくして、江戸の書肆、和泉屋金右衛門により再刊されることになる¹⁵⁾。

ここまで述べたように、拙堂は同時代清代の「経世」の学術を高く評価していたのだが、「経世文編抄序」には、中国史上における清代の学術についての位置付け、和刻本『経世文編抄』刊行の意図などについても詳細に触れられているため、以下その内容を紹介しておこう。

後世俊傑の士、漢の賈長沙（賈誼）、董膠西（董仲舒）、唐の陸宣公（陸贄）、韓文公（韓愈）、宋の欧蘇二文

忠公（欧陽脩・蘇軾）、李忠定公（李綱）の倫の如きは、其の章疏論説、世を経すべき者多し。亦、其の材徳、若の学識、文を待たずして能く自ずから文なる者有る故のみ。独り六朝衰乱之余、人材寥寥たり。文も亦、之に従りて雕蟲の技、戲翫の具と為れり。世に於て損益する所無きなり。蓋し文一たび六朝に亡ぶ。昌黎（韓愈）之を振るふも再び五代に亡ぶ。廬陵（欧陽脩）之を振るふも、明末に至る迄、文の弊は變毎に愈いよ下る。当時、豪傑の士、力を出して之を振るはんとする者有る無し。遂に潰裂四出して、国祚も亦、従りて終ふを致す。満清の興るに及び、士習不変し、頗る能く経に通じ古を学ぶの尚ぶべき、時を救ひ道を行ふの希ふべきを知る。故に其の文、賈・董・韓・歐を望む能はずと雖も、而して亦、世を経すべき者尠ならず。……此の編（『皇朝経世文編』）、既に経世を以て名と為す。邪僻の論、游戲の作は一切載せず。唯だ其の世道人心に関はり、社稷生民に係る者を採るのみ。學術・治体自り、官制・農政・典礼・兵馬・刑律・水利等に至るまで、門を分かち部を立て、彙集臚列し、其の体、大いに前代の文粹文鑑の撰に異なる。……経世の学に志する者は、読まざるべからざるなり。（『経世文編抄序』、『拙堂文集』卷三）

齋藤拙堂によるならば、中国の學術史は次のように把握される。まず古代の理想的な時代（「三代」）の後、賈誼や董仲舒を生んだ漢の「文」は六朝時代に一度滅びる。唐代に至り韓愈が「文」を振興するが、再びこれは五代の戦乱に滅び、次いで宋代に欧陽脩がいま一度「文」の振興に努めたものの、その後は明末に至るまで「文」は衰退するばかりであった。ところが「満清」の勃興とともに「士風」は一変し、賈誼や董仲舒、韓愈や欧陽脩には及ばないものの、「経世」のための「文」が少なからず現れるようになったと言うのである。拙堂の同時代清朝の學術への高い評価が示されるとともに、まさにそのような清代學術の精華を垣間見ることができるアンソ

ロジこそ『皇朝経世文編』であるとされる。

拙堂はこの序文の別の部分で、「天地を経緯するは文と曰う」という左伝の一句を引いているが、彼にとって「文」とは、天地・世界に秩序を与え統治する「経世」に資する行為そのものでなければならなかった。そのような観点から見ると、六朝時代における「文」とは、表面的な技巧を凝らした遊戯に過ぎず、「文一たび六朝に亡ぶ」と評価されざるを得なかったのである。

さて、この序文では「満清」の勃興により、中国の知識人たちの気風が一気に好転したことが説かれていたが、清朝のことを指す「満清」という語彙は、さきの齋藤竹堂『鴉片始末』にも見られたほか、塩谷宕陰、横井小楠、佐久間象山、會澤正志齋なども使用しており、幕末期にはかなり広く流通していたと思われる。¹⁶ ここで検討すべきは、「清国」でも「漢土」でもない「満清」という語彙がどのような文脈の中に埋め込まれながら現れるのか、ということである。同時代の儒学者たちの文中から、「満清」の用例をいくつか紹介しておきたい。既に紹介した齋藤竹堂『鴉片始末』、ならびに、横井小楠「国是三論」、塩谷宕陰「書夷情備采前」の三種である。なお、この中で横井小楠「国是三論」のみ和文で書かれている。¹⁷

・満清、漢土を奄有すること二百年、北のかた韃靼より起こり、西のかた四部諸域に主たり。幅員万里、皆臣妾と為し、其の疆の大なること、力の強なること、漢土有りて自り以来、未だ之を聞かざるなり。（齋藤

竹堂『鴉片始末』）

・今の満清は古の所謂北狄より興り、明を滅して中国に入り邦俗をも一変せしかど、康熙・乾隆の諸帝、賢徳有て政治を明かにし、文教を一新し克く太平を致すといへ共、開国以来百数十年道光・咸豊に至つて昇平

の久敷、其弊驕傲文弱に流れ、海外諸国の、往々理を窮め智を開き、仁を施し義を崇び、国富み兵強く、諸夏の亡きが如くならざるを知らず。(横井小楠「国是三論」)

・西洋、南洋、北洋を挙げて皆蠲文を用ふ。而して漢文を用ふる者は、満清、安南、朝鮮の数国に過ぎず。

(塩谷宕陰「書夷情備采前」、『宕陰存稿』卷一一)

齋藤竹堂によれば、「満清」は「韃靼」より興ったが、「漢土有りて自り以来、未だ之を聞かざる」ほどに広大な領域を治め、強力な勢力を誇った王朝だった。こうした贅嘆にも近い「満清」への評価は、海外諸国を蔑視していた「中夏」の自尊意識への厳しい批判とは、相容れないように感じられるかもしれない。しかしながら、こうした一見背反するがごとき「満清」評価に対する疑問は、横井小楠の「国是三論」に照らせば、やや氷解するであろう。「満清」はもともと「北狄」から興ったのだが、康熙帝・乾隆帝など清朝中期までの皇帝は、「賢徳」あつて「文教を一新」したと言う。こうした清朝への認識は、「満清の興るに及び、士習丕変」したと述べる齋藤拙堂のそれと一致する。また、拙堂は『経世文編抄』に附された評語の中で、乾隆帝については「好学」、「文明之治」、「英明之資」などと称賛しており、とりわけ高い評価を与えていた。¹⁸⁾

すなわち、横井小楠にとつても、齋藤竹堂や齋藤拙堂にとつても、「満清」―満州族による清朝―は、「韃靼」、「北狄」と呼称される中華世界とは程遠い周縁から勃興しながら、「賢徳」ある「英明」な皇帝のもと、明代までの退廃や衰亡を一変させたと評価されていたのである。ただし、その後「道光・咸豊」年間には「驕傲文弱に流れ」、アヘン戦争の敗北を喫することになったのであり、過去の強大と現在の「驕傲文弱」とはいずれも事実として認識されていた。なお、小楠の「国是三論」では、「支那の兵力衰弱にして、諸州の凌辱を受ける所以なり」

のように、特定の王朝から離れた一般的な中国呼称としては、もっぱら「支那」が用いられており、小楠にとっても、同時代の中国は、既に諸外国から侮りを受ける地球上の一国に過ぎなかったのである。

最後に塩谷岩陰「書夷情備考前」の内容に触れておこう。岩陰によれば、西洋・南洋・北洋など世界の多くで奇妙な横書きの文字（「蠕文」）が使われており、「漢文」を使用しているのは、「満清」、安南、朝鮮など数国に過ぎない。ここで注目しておきたいのは、「漢文」を使用している国家との一つとして「満清」が挙げられていることである。しかし、もともと「漢文」が「中華」、あるいは「漢土」から周辺地域に伝来したものであるならば、「漢土」を統治する清朝について、それを「漢文」を使用する国家の一つとして数え上げるのは奇妙なことであると感じられるかもしれない。ただ、齋藤竹堂や横井小楠の述べるように、「満清」を「韃靼」、「北狄」から現れた満州族の国家としての側面から見ると、出自は「夷」でありながら、「漢文」世界に参入した勢力として位置づけることもできるだろう。つまり、「清」、「清国」ではなく、「満清」呼称を使用する場合には、その満州族としての出自と、それゆえに倨傲な「漢人」の気風を一新した、過去の王朝との断絶面が強く意識されているのである。

江戸時代初期の「華夷変態」において、清朝は当初「韃靼」という蔑視を伴う呼称で表記されていたのだが、それがまもなく敬意と畏怖を込めた「大清」へと変わっていったことは、川勝守が明らかにしている。¹⁹ただ、「満清」は、一面では乾隆期までの強盛な清朝を評価するニュアンスを持っていたのだとしても、それはいまや決して「大清」ではない。現在はその「驕傲文弱」ゆえに西洋に遅れをとっている東方の一国に過ぎないのであり、一面から見れば、「満清」とは、「大清」から現在の優位性を削ぎ落とすことで、その強盛を歴史的な過去に限定

するとともに、中華王朝の相対化を図っていく呼称であったのだと言えよう。

二 自国呼称——「皇国」の世界像——

中国という外部にある他者をどのように認識し、どのように呼称するのか、という問題は、どのような欲望のもとに「自己」としての「日本」を認識しようとしているのか、という問題と対をなしている。だとすれば、齋藤拙堂の自国呼称についても検討しておく必要があるだろう。ここで取り上げるのは「皇国」であり、同時にその語彙の背後にある世界像である。⁽²⁰⁾

(一) 「皇国」

これも既に触れたように、「我邦」と「彼邦」という対比によって、日本と中国を指示している場合も多いため、「皇国」の使用頻度が決して高いわけではない。すべて漢文によって書かれた全六巻の『拙堂文集』のなかには、「皇国」が使用されているものは、管見の範囲では先に引用した「八紘勝覧序」を含めて六篇しかない。これは、少数の「皇国」の用例が、主題や文脈に照応する意識的な選択の結果であったことを示唆するように思われる。まず共通の主題を扱っている二つの文章から用例を引いておこう。

忠臣義士の出るは、譬ふれば麟鳳の瑞の如し。宜なるかな、人人其の出る所を識らんと欲するなり。楠中將の皇国_、に生るるは、実に儀鳳祥麟為り。〔南木祠碑陰記〕、『拙堂文集』卷一

皇国、君臣の義、万邦に冠たり。而して楠中将一門は其の称首為り。……皇国、忠義の門多しと雖も、蓋し一有りて二無し。我が邦は皇統万世にして天壤と共に敝れる。神明の遺徳と雖も、忠臣義士も亦与りて其の間に力有りと言はざるべからず。……士大夫にして其の君に忠たらんと欲するは、皆中将を師法とす。是、中将天地の為に綱常を植ゑ、人倫の為に軌範を垂るるなり。万世臣道の鑑なり。（楠木誌序、『拙堂文集』卷三）この二篇はいずれも楠木正成に関わつて書かれたものである。前者は、楠木正成生誕の地に「楠中将降誕之地」の石碑が建てられたときにそれに寄せて著された「記」であり、後者は、楠木正成とその一門に関する史料集成として編纂された『南木誌』に対して、編者の中山利質から求められて記した「序」であつた。⁽²⁾特に後者について言えば、短い二葉ほどの「序」のなかに「皇国」という語彙が四箇所も使用されており、明らかに語彙選択への明確な意志が認められると言えよう。

では拙堂にとつて「皇国」のイメージとはどのようなものだらうか。それはまず、「皇統万世」にして天地とともに途切れることのない天皇家の歴史と、何よりもそれを維持するために力を尽くした「忠臣」の存在によつて比類なき光輝を持つ世界である。拙堂によれば、「君臣の義」が「万邦に冠」たる卓越した列島の歴史こそ「皇国」ということばを成立させる内実である。

以上の二編については楠木正成の顕彰と「皇国」との照応関係が想定されるのだが、他の諸編についてはどうだらうか。

漢学は既に我が邦の面目に非ず。然れども世に行はれて已に久し。更に蘭学なる者有り。盛んに世に行はる。……此の時に方りて苟も能く十一を千百より存する者有り。則ち我が皇国、の面目なり。庶幾はくは、亡

滅に至らざらん。吾が津府下の人、生川某、我が邦の言葉の学を修め、軻響一百冊を著す。噫、亦夥しきかな。夫れ漢学は既に世に益する有り。蘭学も亦、世に補ふ所無しと為さず。然れども皆他山の石なるのみ。蓋し石は以て玉を攻むべし。然れども、玉の面目を識らざれば、則ち亦手を下す所無し。是に於て、軻響も亦、今世に缺くべからざるを知るなり。〔軻響序〕、『拙堂文集』卷三）

皇国[、]の学は、言語を以て主と為し、文字を以て奴と為す。主貴くして奴賤しきは固よりなり。然れども言語は必ず文字を待て世に行はる。……是を以て国学者の流は必ず先ず仮字を研覃す。小倉黄門の仮名遣自り揖取魚彦の古言梯に至るまで、世に多く其の書有れど、猶ほ遺漏訛語無き能はざるがごとし。我が藩の寺田長興、之を思ひ……勒して一書を為り、名づけて手束杖と曰ふ。〔仮名遣手束杖跋〕、『拙堂文集』卷六）

ここに挙げた二つの文章は、いずれも津藩の生川某、寺田長興の編纂した「国学者流」の仮名遣にかかわる考証に寄せた「序」、「跋」である。²²⁾漢学でも蘭学でもなく、我が国独自の歴史・伝統に基礎づけられた「面目」を明らかにする「国学」研究に言及する際に、「皇国」が選好されていたわけである。なお、これらの「序」、「跋」は齋藤拙堂の学問論を考えるためにも極めて興味深い史料であると言えよう。たとえば、「仮名遣手束杖跋」において、拙堂は、「皇国の学」においては文字化される以前の音声言語こそが先んじて存在する「主」であり、その器としての文字言語は、「主」に奉仕する「奴」に過ぎないと述べている。言い換えれば、「文字」は、「文字」の背後にある声としての言語を探究すべきであり、確かにここにおいて拙堂は「皇国の学」、国学に近いといえるように見える。

このように、我が国独自の伝統への言及が「皇国」を文脈の中に呼び出してくる契機となっていることは、残

りの二つの用例からも窺い知ることができる。同じく「皇国」という語彙が見える「正四位上権禰宜度会神主足代君墓碑銘」は、伊勢神宮の権禰宜を務めた足代氏の家に生まれ、本居太平、春庭に国学を学んでいた足代弘訓の没後に送った墓碑銘である。ここに足代弘訓の功績として「苟も祀典を修めて失墜せしめざるは、亦皇国に忠たる所以なり」とあり、ここでも「皇国」は伊勢神宮の「祀典」の伝統と、足代弘訓の国学への傾倒と照応しているのである。

また、すでに紹介した「八紘勝覧序」についてであるが、ここでは、「皇国人」「支那人」「西洋人」が鼎立的に提示されるとともに、「皇国人」の地理空間的な活動領域を「諾尊（イザナギノミコト）の生む所」と、述べていた。すなわち、ここにおいても、「我が邦」の固有な地理空間的領域を、「諾尊（イザナギノミコト）」という古代・国学的文脈にまで遡って基礎づけようとしたときに、「皇国」が立ち現れることになったのだと言えよう。

以上、ここまで見てきたのはすべて『拙堂文集』に収載された漢文著作であったのだが、当然ながら拙堂には和文による著作もある。最後に確認しておきたいのは、和文の著作において、どのような中国呼称、自国呼称が用いられていたのかである。取り上げるのは、天保二年（一八三一年）までに執筆され、慶応二年（一八六六年）にも増補版が刊行されている『救荒事宜』²³、ならびに、天保八年（一八三七）年に執筆され、嘉永三年（一八五〇年）に刊行された『士道要論』である。この二種における自国呼称はいずれも「皇国」であった。

初にいつまでもたくはへをくを国史に不動穀といへり。是皇国の古法也。（『増補救荒事宜』）

誠に聖人の道を学たまはんとならば經典にて事たりぬべし。遣唐使などたて玉ふには及ぶまじ。いたづらに外国末世の弊風を学びて皇国醇朴の風を失ひそのうへ仁柔なる仏法をむねとして王法をみだりたまひしかば

文弱の風に流れて王室の衰とはなりぬ。（『士道要論』）

『救荒事宜』は、歴代中国のさまざまな逸話を引きながら、救荒における具体的な方策や配慮すべきことなどを網羅しているのだが、ここでは中国の逸話をもっぱら「唐」「宋」「明」などの王朝名で示されているのみである。一方、自国呼称は先に述べたように「皇国」なのだが、これは末尾補編の「常平義倉社倉貯穀之事」にある。中国史上において行われていた常平倉・義倉・社倉について触れながら、「国史」に見える「古法」について述べるときには「皇国」が使用される。一方の『士道要論』だが、ここでは「外国末世の弊風」と「皇国醇朴の風」が明確に対比されており、「万邦に冠」たる偽りなき「君臣の義」が脈々と維持されてきたとする「楠木誌序」の叙述と響き合う語りになっている。

このように見るならば、和文著作に現れる「皇国」も、漢文著作と同様の文脈に位置付けられているとも見ることができよう。ただ、同時に再度想起しておきたいのは、拙堂が国学に連なる「仮名遣」の考証に寄せた序文、跋文において、「皇国」が用いられていたことである。だとすれば、和文という著述の手段自体が「皇国」と親和的であった可能性も、考慮されるべきであるかもしれない。著述に用いられる言語と、採択される語彙との関係性については今後の検討に委ねたい。

（二）国学と漢学

齋藤拙堂の著作の中には、「蘭学」起源の「支那」、「国学」起源の「皇国」が混在していたのだが、儒教を学んだ「漢学」の徒であった拙堂の世界像において、それらはどのように矛盾なく共存することができたのだろうか。

「支那」について言えば、それは「泰西」、「西洋」との対比において出現するのだが、拙堂にとって、「泰西」、「西洋」は「支那上古の風」を体現した世界である。つまり、その意味において、「泰西」、「西洋」の学を受容したとしても、拙堂の内面に深刻な矛盾、世界像の亀裂を発生させることはない。「泰西」、「西洋」こそ、墮落した「支那」に代わって「支那上古」の精髓を保存しているのかもしれないのである。少なくとも拙堂にとって「泰西」、「西洋」は根源的な価値の転換を迫るようなものとして認識されていない。

ただし、「皇国」の世界像は、それよりもずっと厄介な問題をはらんでいた。「醇朴の風」と、世界に冠たる「君臣の義」に基づいて現れる「精忠」によって「皇統」が守られてきた歴史を根柢として、「皇国」が自明に内側から満たされて成立していたのだとすれば、渡辺浩がつとに指摘しているように、儒教を核心として成立している異国の学問である「漢学」を何のために学ぶのか、そもそも学ぶ必要があるのだろうか、という問いは必ず生じるはずである。では、拙堂にとって、「国学」と「漢学」の関係性はどのようなかたちで意識されていたのだろうか。

この点を考えるために、同郷津藩において、国学に傾倒していた高橋知周の墓銘として書かれた一文「故郡奉行高橋君墓銘」をまずは検討しておこう。高橋知周は津藩で郡奉行などを歴任しているが、その学問は「本居氏」に淵源する国学の徒であり、先に挙げた津藩寺田長興の『手束杖』に序文を寄せていた（仮名遣手束杖跋）。つまり『手束杖』という書物は、序文を高橋知周が、跋文を齋藤拙堂が書いていたわけである。

君、諱は知周、通称は省五郎。高橋氏なり。世よ津藩に仕へ、百二十石を食む。……君の学、本居氏に淵源し、甚だしくは世儒の説を喜ばず。但だ、余と相得て甚だ歡ぶ。遺言して其の墓に銘せんことを求む。余、

敢へて辞せず。之に銘して曰く、和漢道を同じくし、東西宜しきを異にす。或いは同じく、或いは異にして、偏倚すれば則ち乖く。和ならず漢ならずして、調適すれば則ち諧ふ。和歌は雅なりと雖も、何の設施有らんや。漢学は迂なりと雖も豈に葑菲無からんや。律令格式は周官の遺なり。他石もて玉を攻むるに、選びて其の材を取る。「故郡奉行高橋君墓銘」、「拙堂文集」巻五）

この一文では、親交を結んでいた高橋知周の生平について紹介するとともに、末尾の「墓銘」において「和漢」の学を対照しつつ、いずれか一方にのみ傾倒すること（「偏倚」）を戒めている。曰く、和歌は雅ではあるものの学知としては組織的体系性に欠ける。一方、漢学は、日本社会の現実には照らせば、いかにも迂遠に感じられるとしても、あたかも「葑菲」と同じように、根に苦味があるからといって葉まで捨て去ることは適切ではない。では、漢学者・齋藤拙堂にとつても「迂」であると認識されている漢学はどのように有用なのか。漢学は、「和」の伝統という「玉」をみがく「他石」（他山の石）として有用なのである。

次に、この論点をやや詳細に展開した「翻刻資治通鑑跋」を紹介しておこう。津藩有造館において『資治通鑑』の翻刻が計画されたとき、拙堂はその事業の責任者を委ねられていた。この一文は、その津藩有造館による和刻本に寄せられた「跋」である。

宋の司馬氏、時の君の為に歴代君臣の事蹟を撰述す。……我を以て之を觀れば、地の相隔たること、万有余里、世の相距たること、近きは千年、遠きは二千年にして、痛痒相通ぜず、肥瘦相関はらず。且つ、其の臣の主を篡ひ、夷の夏を猾するの禍、本邦には未だ曾て有らざる所なれば、資するべきに非ざるなり、鑑とすべきに非ざるなり。然らば則ち公の是の挙、殆ど益無しと謂はんや。曰く、非なり。詩に云はざるや、佗山

の石もて、以て玉を攻むべし、と。蓋し玉質美なりと雖も、自ら治むる能はず。必ず佗石に資けられて後、其の善尽くさるるなり。邦俗美なりと雖も、玉は璞なるのみ。璞は以て珣を為り、璚を為るべからず。之を治めんと欲する者は、佗に資けらるる無きを得んや。……今、我が士民、湛恩に沐浴し、上下相安んじ、宴安の毒、或いは杞天之憂と為す。是に於て、外国には治少なくて乱多く、民、塗炭に苦しむを知らしむれば、一は則ち、竦然として自ら警め、怠惰驕肆に至らず。一は則ち、歓然として自ら賀し、上を戴くの心益ます深し。而して之が上為る者も亦、彼の禍乱を視て以て戒めと為し、益ます民を撫し武を奮ひ、外敵の侮りを啓かざれば、則ち国家益ます清浄にして事無きなり。然らば則ち、此の書、猶ほ治に資すべき有り、鑑として通すべき有り。（『翻刻資治通鑑跋』、『拙堂文集』卷六）

司馬光の『資治通鑑』は、北宋以前の中国の歴史を叙述したものであり、空間軸においても時間軸においても幕末の日本とは遠く隔たっている。しかも、拙堂によれば、「本邦」においては臣下が主君から権力を篡奪したり、外夷から侵略を受けたりという事態は存在しない。「皇統万世」である我が国にとって、「革命」とともに王朝が興亡を繰り返してきた中国の歴史から、「鑑」として学ぶべき有用な知恵などはないのかもしれないのである。では、なぜ『資治通鑑』を翻刻したのか、あるいはそもそもなぜ漢学を学ぶのか。

ここで再び拙堂が説くのが、「佗山の石」、「他石」の理屈である。我が国の風俗習慣はうるわしく、あたかも「玉」に例えられる。しかし本来的にそれが「玉」であるとしても、それはまだ磨き上げられる前の素材であり、他山の石（「佗山之石」、「他石」）によって研磨されていく必要がある。そしてその他山の石こそが中国の学知であるというのが拙堂の言い分であった。

拙堂の見るところ、同時代の日本は安楽にふけり、世の乱れや災いなど杞憂であると感じているものも多い。しかしだからこそ、中国では「少治多乱」で民が塗炭の苦しみにあえいでいたことを知らしめ、現在の平穏なる秩序の稀少性を認識させる必要がある。また、上に立つ為政者は、中国の「禍乱」を戒めとして、「外敵の侮り」を受けないように努めれば、国家の「清浄無事」は保たれるのである。

拙堂が漢学の有用性を説くためにたびたび使用した他山の石という比喻において、中国と、そこから伝播した儒教・漢学という学知は、本邦の我々の〈外部〉に存在する他者である。それはあくまでも〈外部〉の他者に過ぎないゆえに、我々の内部にまで浸潤することはない。我々の内部には、本来的な美質としての「玉」がはじめから存在しているのだが、それはそのままでは無自覚にして磨かれることがない。内面の美質を十全に發揮するためには、〈外部〉において展開されてきた戦乱の惨禍の歴史を知ること、自らを戒め、外敵に備えなければならぬのである。拙堂はこのようなかたちで、日本社会における漢学の有用性を担保しようとしたのだが、それは〈外部〉にある危機を知ること、自覚的に〈自己〉としての国家を練磨する手段として位置付けられることにより、「皇国」の世界像と並存することができたのである。

おわりに

江戸時代に活躍した儒学者と言っても、たとえば一八世紀の初めにおいて貝原益軒が見ていた世界像と、それから百年以上のちの幕末を生きた儒学者たちの世界像はあまりにも異なっている。益軒にとっては、「中華」、

「中土」が文明の源泉として世界の「中央」にあることは自明であったのかもしれない。²⁴⁾

モロコシハ天地ノ中央ニアリテ、風氣ノ正シキ国ナレバ、イニシヘヨリ、サバカリノ聖人・賢人、世ニ多ク出デ……天地ノ道ヲツギ行ナヒ給フ。……是夷狄ノ中華ニ及バザル所也。ワガ日ノ本ハ、天地ノ内ニオキテ、南北ノ中央ニアルコト、中華ト同ジケレバ……四夷ノ諸国ニクラブルニ、スグレタル善国ナリ。……只学問ノ一事ノミ、中土ニ及バズ。（貝原益軒『五常訓』巻一）

もちろん益軒にとっても、「ワガ日ノ本」の優秀性を合理的に説明することは重大な関心事の一つではある。しかし、益軒の場合には、それは、列島世界が「中華」に近いがゆえに、「中華」と同じように天地の中央に近いことによって証される。その点では、「中華」と「日ノ本」とは、ともに風氣正しき善き世界なのだが、ただ一つだけ、学問の広がりと深さにおいてのみ、「日ノ本」はなお「中土」に及ばないというのである。

齋藤拙堂をはじめ、幕末に活躍した儒学者たちは、その著述の中で、多様な中国呼称、そしてそれと対になる自国呼称を用いている。ただし、古賀侗庵や塩谷岩陰、あるいはここで取り上げた齋藤拙堂にしても、彼らの著述の中では、「中華」、「中土」などの呼称が現れることはない。換言すれば、文明の中心としての「中華」と、その周辺における「四夷」という伝統的な階層的秩序を想起させる語彙は周到に忌避されるのである。すなわち、彼らがその多様な呼称の中からのどの語彙を採用するのかは、そのつど熟慮された選択の結果であり、無自覚な反復や模倣ではなかったのだと考えられよう。

拙堂の場合について言えば、進んだ学知を持つ西洋との対称として中国を取り上げる場合には、いわば陽画に對する陰画のように、「支那」という蘭学由来の中国呼称が用いられていた。また、用例は少ないものの、拙堂

の著述には「西土」という呼称も登場するのだが、これは同時代の多くの儒学者たちが「漢土」を、より多く用いていたことに比べると特徴的である。たとえば江戸時代における中国呼称を網羅的に概観した佐藤三郎も、「漢土」、「唐土」、「唐山」などは挙げているが、「西土」は挙げていない。⁽²⁵⁾つまり、古賀侗庵や齋藤拙堂の「西土」についても、「漢学」の唯一の源泉であることを含意する「漢土」ではなく、意識的に東と西を同一次元において対置し、階層的秩序への想起をあらかじめ排除しておく呼称として選択された結果であったと言えよう。⁽²⁶⁾

「満清」にしても事情は同様である。この語彙は、同時代の中国の統治者が、「北狄」から現れた満族による征服王朝であることを強く意識させる。征服王朝であるゆえに明朝までの退廃は刷新されたかもしれないが、いやや再び文弱に流れ、領域はなお巨大なれど、世界の中では満族の支配する一国に過ぎない。

そして拙堂は、このような中国と対照される自国の伝統を、はじめから「玉」なる美質を備えた「皇国」として特権化する。ここにおいて、かつて貝原益軒らの思い描いた「中華」と「四夷」、つまり文明の「中心」とそれがなお十分には及んでいない「周縁」という東アジアの階層的世界像は完全に無効化されたのである。もちろん、幕末を生きたすべての儒学者たちが、拙堂のように「皇国」の世界像を意識的に掲げたわけではないのだが、それにしてもなんらかのかたちで中国の相対化と自国の絶対化、あるいは少なくとも自国の優位性の確認に向けて思考の舵を切っていたことも否定し難いであろう。明治以降における「皇国」ナショナリズムへの萌芽は、すでに近世末期の儒学者の思考のうちに育まれていたのである。

- (1) 渡辺浩「泰平」と「皇国」(『東アジアの王権と思想』東京大学出版会、一九九七年、所収)。以下、渡辺浩の研究に言及する際には、すべてこの論考による。
- (2) 日本近世・近代における「支那」呼称については、前掲渡辺のほか、佐藤三郎「日本人が中国を「支那」と呼んだことについての考察」(『近代日中交渉史の研究』吉川弘文館、一九八四年、所収)において網羅的な概観がなされている。また、近代日本における「支那」呼称への執着については、齋藤希史「支那」再論」(『漢文脈の近代 清末・明治の文学圏』名古屋大学出版会、二〇〇五年、所収)、山田賢「差別の歴史的文脈について——「支那」という呼称——」(『三宅明正・山田賢編』歴史の中の差別 日本経済評論社、二〇〇一年、所収) などがある。
- (3) 前田勉「古賀侗庵の世界認識」、「幕末日本のアヘン戦争観」(いずれも『近世日本の儒学と兵学』ペリカン社、一九九六年、所収)。
- (4) 眞壁仁「徳川後期の学問と政治 昌平坂学問所儒者と幕末外交変容」名古屋大学出版会、二〇〇七年。とくに「第Ⅱ部 視圈拡大と変通論—古賀侗庵」など。
- (5) 直井文子「齋藤拙堂年譜稿」、「お茶の水大学人文科学紀要」第四一卷、一九八八年、齋藤正和『齋藤拙堂伝』三重県良書出版会、一九九三年、大谷敏夫「幕末経世思想についての一考察—齋藤拙堂の思想を中心に—」、「『鹿太史学』五二号、二〇〇五年、など。
- (6) 齋藤拙堂の記、序、跋などの漢文で書かれた論説については、門人であった中内惇によって『拙堂文集』が編纂され、一八八一年(明治一四年)に刊行されている。ただし、編者の中内惇自身が、凡例において「先生原稿は、錯雑として次序無し。又、多くは年月を記さず。故に其の先後は、辨ずるに易からず」、「先生の文、散佚尠からず」と述べているように、おそらく散逸したのも多く、文章の配列次序も履歴等からおよその執筆年代を推測して配列

されたものである故に、考証には制約を免れない。

(7) 新宮涼庭には『驅豎齋詩文鈔』があるが、一八六二年(文久二年)、齋藤拙堂は『驅豎齋詩鈔』に「序」を寄せており、両者には交流があったこと、拙堂の関心が蘭学、西洋医学にも及んでいたことが推察される。

(8) 箕作阮甫『八紘勝覧』については、国立国会図書館憲政資料室蔵、箕作阮甫・麟祥関係文書に収められた手稿本が現存するが、ここには齋藤拙堂の序文は見られない。管見の限りでは、書肆から出版された『八紘勝覧』を見出すことはできず、出版に至らなかったとするならば、拙堂の序文も目の目を見ることがなかったと考えられる。

(9) 津藩有造館では、天保七年(一八三六年)、齋藤拙堂を「総督之任」に当て(齋藤拙堂「翻刻資治通鑑跋」、『拙堂文集』巻六)、資治通鑑の和刻本を刊行しているが、のち弘化四年(一八四七年)に、玉巖堂和泉屋金右衛門からこれを再刊している。また、同じく津藩有造館から、嘉永元年(一八四八年)から嘉永五年(一八五二年)にかけて刊行された『経世文編抄』も、和泉屋金右衛門から後印されている、さらに、拙堂が自ら編纂した『高青邱詩醇』もまた、嘉永五年(一八五二年)にやはり和泉屋金右衛門によって発行された。

(10) 現在知られている『士道要論』の版本は、天保八年(一八三七年)の自序を掲げる嘉永三年(一八五〇年)の刊本である。発行書林は、河内屋喜兵衛・山城屋佐兵衛とあるが、序文の前には「造士館刷印」とあり、末尾には「甘雨亭主人」(安中藩主板倉勝明)による短い跋文があるため、もともと安中藩学・造士館にて刊行したものを、河内屋喜兵衛・山城屋佐兵衛によって後印したものではないかと考えられる。

(11) ここでは佐久間象山と横井小楠について語彙例のみ挙げておこう。たとえば佐久間象山「和蘭語彙出版に関する老中阿部正弘宛上書(嘉永三年三月)」(『渡邊華山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』(日本思想体系五五)、岩波書店、一九七一年、所収による)では、「西洋は漢土と違ひ」、「漢土の説に拠り候へば」と見える。ただし、佐久間象山の場合も、一貫して「漢土」のみを用いていたわけではなく、「海防に関する藩主宛上書(天保一三年一月二十四日)」(前掲書)では、「唐山」を使用していた。横井小楠についても、「学校問答書(嘉永五年三月)」(前掲書)では「大和にても漢土にても古も今も学校を興し玉ふ」のように「漢土」を、「国是三論(万延元年)」(前掲書)

では、「支那」、あるいは「満清」が使われていた。

(12) 前掲「海防に関する藩主宛上書（天保一三年一月二四日）」では、「イギリス夷、唐山と乱を構え」「此度唐山と戦争に及び候」「唐山頻に利を失ひ」など見え、ここではもっぱら「唐山」が使用されている。

(13) 前掲「国是三論（万延元年）」（前掲書）より、「富国論」には、「宜敷支那に鑑るべし。……自ら中国華域と称し、外国を待つに蛮夷を以てするは古に異ならず」、「強兵論」には「是支那の兵力衰弱にして、諸州の凌辱を受ける所以なり」などの用例が見えるが、いずれも「中国華域」などという尊大な自己認識を有しながら、現実には「兵力衰弱」ゆえに、諸外国から「凌辱」を受けている、という批判的な語り口の文脈とともに「支那」が現れる。

(14) 塩谷宕陰「請修史書」、「宕陰存稿」巻二、に「拳漢土幅員万里千載不世出之人、集之於六十余州三百年之間、筭而較之、豈不我大勝於彼乎」とある。また、同じく「宕陰存稿」一一、「書清蘭鴉片單報後」にも、「西夷住澳門二百年、漢土之情、莫不知焉」とあるように、宕陰の場合には、「清」、「清国」以外に、中国という「場」、そこにおける状況などに言及する場合には、「漢土」が使用されている。

(15) 『皇朝経世文編』の伝来と『経世文編抄』については、山田賢「日本近世における漢籍輸入と「経世」思想」、「日本思想文化研究」二巻二号、二〇〇九年、参照。ここでも触れたように、吉田松陰、河井継之助らも『経世文編抄』を読んでいたと思われる。浩瀚な『皇朝経世文編』を、日本社会の現実にとって有用か否かという観点から抜粋し、「評語」という読書案内を附した『経世文編抄』は、「実学」という観点から同時代清朝学術の概略を知るための、簡便な入門書として流布したのではなかったか。幕末以降における『経世文編抄』の影響については、今後考察すべき課題である。

(16) 「満清」呼称がいつごろから一般的に使用されるのかについては明らかではないが、眞壁仁「徳川儒学思想における明清交替―江戸儒学会における正統の転移とその変遷―」、「北大法学論集」六二―六、二〇一二年、は、太田錦城「明清革命論」に「満清」という語彙があることを紹介している。一八世紀後半から一九世紀初頭を生きた太田錦城がこの語彙を使用しているところによれば、やはりこのころから「満清」が広く使われていくようになった可能性

はあるだろう。なお、錦城もまた、清朝が「夷狄」より出自するとは言え「有徳」ゆえに天命を得た正統王朝であると説いている。また、本文中に引用した儒学者たち以外では、たとえば前掲の佐久間象山「和蘭語彙出版に関する老中阿部正弘宛上書（嘉永三年三月）」が挙げられる。前述のように、中国という場を指す場合には「漢土」を使用しているが、アヘン戦争の対応を誤った現王朝については、「天下満清の覆轍に遠ざかり」のように「満清」と記す。そのほか、會澤正志齋『新論』では「満清は神州の東に在り」、「神州の外、独り満清有るのみ」（巻上、形勢）のように、清朝を指す場合には「清」、「満清」がもっぱら使用されていた。

(17) 「国是三論」については、『渡邊崋山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』（日本思想体系五五）、岩波書店、一九七一年、所収による。

(18) 拙堂の評語二例を掲げる。「清高宗夙以好学称。方即位之初年、近臣進言、已慮及深宮之作輟。豈真有是事。蓋予防其未萌也。勤勤懇懇、中多名言。以斯君而聽斯言。其致文明之治也宜矣。」（乙集中、治体三、畢誼「請繕進經史以資聖治疏」評語）、「董浦論當時之治、以為不及漢唐宋之盛時。切直亦已甚。而高宗以英明之資、屈己受之、莫忤於心。是乾隆之所以為乾隆也。其能致六十年之隆治、駕出漢唐宋之上、宜哉。」（乙集中、治体四、杭世駿「經筵講義」評語）。拙堂の高宗乾隆帝への評価は絶大である。

(19) 川勝守「韃靼國順治大王から大清康熙大帝へ」（『日本近世と東アジア世界』吉川弘文館、二〇〇〇年、所収）。

(20) 幕末期において儒教的教養を基礎に置いていた知識人たちが、どのような自国呼称を用いていたのかは、今後の課題としなければならないが、「皇国」の語彙を目にすることは多くはない。齋藤拙堂以外に、「皇国」を頻用した文章としては、たとえば佐久間象山「時政に関する幕府宛上書稿（文久二年九月）」（前掲「渡邊崋山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内」所収）に、「皇国と外蕃とは御国体本より同じからず」などの用例がある。

(21) 『拙堂文集』所収によれば、「楠木誌序」とあるが、拙堂のこの文章を序文として収めているのは中山利質『南木誌』である。文久二年（一八六二年）刊本には、弘化五年（一八四八年）の甘雨亭板倉勝明序、嘉永二年（一八四九年）の齋藤拙堂序、嘉永三年（一八五〇年）の齋藤竹堂跋が収められている。

(22) 『勸警』については不詳、後考を待ちたい。寺田長興『手束杖』については、江戸・和泉屋吉兵衛、津・本屋佐兵衛などの書肆による嘉永二年（一八四九年）発行の版本が各地に現存する。後述するように、序は津藩の高橋知周、跋は齋藤拙堂の手になる。

(23) 『救荒事宜』には天保二年（一八三二年）の自序があるため、この頃までに成立したと思われるが、文久二年（一八六二年）に和泉屋吉兵衛・和泉屋金右衛門らをはじめとする三都書肆より発行され、その後、慶応二年（一八六六年）に、大垣にて増補版が発行されている。増補版では「常平義倉社倉貯穀之事」が追録されており、本文史料の引用部分はこの増補分に含まれるため、ここでは慶応二年発行になる増補版の版本に従う。

(24) 貝原益軒『五常訓』については、『貝原益軒・室鳩巢』（日本思想体系三四）、岩波書店、一九七〇年、所収による。

(25) 前掲、佐藤三郎「日本人が中国を「支那」と呼んだことについての考察」参照。

(26) 「漢土」が中国以外を指すことはあり得ないのとは異なり、「西土」は、視点の設定によって「西」方の土地とはどこなのかが変わってくる相對概念である。中国古典語における「西土」とは、中国大陸内部の西方、あるいは中国大陸から見た西方のインドを指すものであり、中国大陸そのものを指す語彙ではない。古賀侗庵や齋藤拙堂が、中国古典語における「西土」用例を知らなかったはずはないとすれば、彼らがあえてこの相對概念としての語彙を用い、日本列島の「西」方に位置する中国を指し示したことの意味についても考察する必要があるだろう。